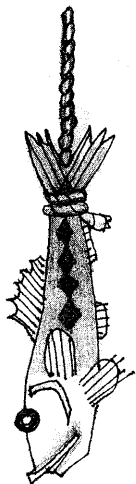


「附属幼稚園教育課程」の 刊行に当たって思うこと

村石 京



幼稚園新教育要領の告示・試行の時期を経て、平成二年度には新教育要領の実施の時期を迎え、幼稚園教育の実践や教育計画等について考えを深めていかねばならぬことが多く出てきた。私どもの園においても、このような時期に当たって現在行っている保育を新たな視点で見直しをし、現代の子どもにより適切であることや、子

ども達の先への見通しをもって延びる芽を育てながら、一人ひとりの子どもが満足し、充実した園生活がおくれるような教育は、どのようにあったらよいかなどについて考えていく機会をもつようにしてきた。

また日々の保育について考えるときにも、系統だてた保育計画や、各々の年齢の学期毎の教育目標、あるいは年単位の教育目標、そして大きくは在園期間を通してどのような子どもに育ってほしいかというねらい、そのための園としての教育目標などについて考えていくことを行ってきた。これがつまり形をとるとなれば当附属幼稚園の「教育課程」であり、考えがまとまりうればこの機会に新たな教育課程の刊行をはかりたいと考えた所以である。そして教育課程の作成を目標にしたがらも、実質的には当園の保育のあり方について職員全員が深く考えていくということを窮極の目的として、「教育課程の研究」をここ数年継続的に行ってきたのである。

よく公開保育の際の協議会や参観に見えた方達から次

のような質問を受けることがある。

①一人ひとりに合わせた保育をし、その子どもの思っていることの実現出来るような教師の援助や指導を行っていることはわかるが、こういった自由保育において園の教育目標やねらいと、実際の保育とのからみはどうなっているのか。

②子どもが主体的に生活をつくり出していくというけれど、それでは園としての教育目標はもたないのか。

③一人ひとりの子どもを伸ばすことが中心となると、その年齢でおさえておかなくてはならないことについてはどう考えるのか。

等々。この辺に関しては少し説明を加えたいと思うが、先ず①・②については次のように考えている。子どもは幼児一人ひとりを大切にし、一人ひとりに合わせた保育を行うことを主眼にしているが、幼稚園はやはり集団生活の場であるので、それなりに幼稚園での生活のきまりもあるし、組としてのまとまりも必要である。自由な保育の中で、子ども同士で遊ぶ時間が多ければ多い程、

子ども同士のかかわりも深くなり、その中でお互いに認め合い助け合って相互に成長しているのである。決して個々がばらばらであってよいのではなく、組とか年齢という単位の生活があるのであれば、それに即した教育目標や指導計画はもつのが当然である。組担任の教師は指導者として、年間の、あるいは学期の、あるいは月の教育目標や教育計画を夫々もっていなければならないし、教育の場とはいえないであろう。唯、同じもつにしても、教育目標や計画が前面に出て、教師の指導のもとに幼児の活動が設定され、幼児が保育者の計画を受け入れていく保育と、夫々の子どもの望んでいることや考えていることがあって日常それを中心とした生活をし、友だちと日々の生活をつくり出していく場である場合とでは、子どもの意欲や遊びへの取り組み方も必ずから違っているであろう。子どもは自分のやりたいとすることが出来る時、それに熱中し、工夫し、創造し、そして人と協力しあってやる楽しさを体験し、相手を認め、共に歩む力を身につけていくのである。これが幼児の人間

としての成長なのである。

この場合、教師は子どもの考えたことがよりよく実現出来るように支え、援助していくことが大切になってくる。三歳児の一学期の初めはまだ友だちとのかかわりも淡く、一緒にいても夫々の要求は個々に異なっていたり、あるいは友だちと全く同じことを夫々が要求する場面もある。保育者はあくまでも一人ひとりが満足しているように、夫々の子どもに合わせて対応していかなくてはならない。年齢や時期が進んで、四歳後半から五歳児になると友だちとのかかわりも深くなり、友だち同士で遊びをつくりあげていく力も次第に伸びてくる。こうした内面の成長があると、遊びは長く続き、工夫が盛りこまれ、グループが出来てその中の活動が多くなってくる。グループの構成は、組の中のメンバーの性格や遊びの種類によって差があり、少人数で幾つものグループが形成されたり、多人数の遊びを好む傾向が見られたり、あるいは組中で一つの目的をもった活動にまとまったりする場合もある。この場合一概に大きなグループの

方が活動がダイナミックであるとか、盛り上がりがある、活き活きしているなどの評価が出来るものではなく、肝腎なのはグループの中であくまでも一人ひとりがしっかりと自分を発揮する形で参加出来ているかどうかという面である。教師はこの辺をよく見て、適切な援助指導を行っていかなくてはならない。やはりこの辺もその年齢なり、その時期なりにおさえておかねばならない基本というものを教師がもっていることが大切なのである。

③に関しては、これは発達をどうとらえるかということに関係してくると思うが、以前は発達は年齢によると考えられ、三歳児の発達、四歳児の発達、そして五歳児の発達というように区分して見てきた。そして同年齢の中でも生まれ月によって発達が違うこと等を個人差という見方をしてきた。しかし今は、発達は年齢としてとらえるのではなく「個の道すじ」という見方になっていく。一人ひとりその道すじは全く異なるし、いろいろな見方の角度によって道すじは種々に入りこんでいる。これは全くその個人によって異なるのであるから、その子

の発達に合わせてその子なりの成長が見られるようにと手助けしていくのが教師の役割といえよう。他の子と同じようにとか、何歳児だからここまでするなどといったことに目がいくと、個の姿が見えなくなり、無理がいつていびつなものになったり、あるいはしつかりと基礎がつくられないでしまったりすることになりかねない。幼児期は現在にのみ基準があるのではなくて、将来その子どもが人間としてよりよく伸びていくための基礎がための時期であるということを常に忘れてはならない。こう考えてくれば、幼稚園においての教育は、個人個人夫々に合わせた教育であることが当然のことである。

そこで教育課程のこともどって考えると、一人ひとりに合わせた教育を行うためには三十三人の級なら三十三人のカリキュラムが必要であるという言葉さえあるが、全くその通りであって大づかみなわくの中では、人間として基礎をつくる幼児期の教育は行うことは出来ないのである。このような考え方が元にあったために、私どもの園では近年教育課程を作成するのにふみ切れない

で過ぎていた。昭和三十九年（幼稚園教育要領改訂年度）に当時の坂元彦太郎園長のもとで作成して以来、新しいものを刊行せずしてきた。そして附属幼稚園の中ではこの三十九年度版のものがいろいろな形で引き継がれてきた。新しく作らなかつたのは、日々私どもが行っている保育は仲々言葉では表しきれないものが多くありすぎるということが大きな理由であったことと、以前に作ったものであってもそこに園の教育方針等がしつかりと盛り込んであれば、年々内容ががらりと変わるといことはあり得ないので、それを引き継いでいけばよいといった理由も一つにはあった。更に「教育課程」を重視しすぎると、現実の子どもの姿が見えにくくなってしまおうという危惧もあったからである。教育課程は必要とは考えられるけれど、それにつくあまりに、現実の子どもの姿を見失ってしまつては本末転倒になってしまう。根本になるものさえしつかりもてば、後は学級責任者が級の子どもの実体に合わせて日々の教育を行うことが大切なのであり、教育課程を重んじすぎて教師自身動きがとれない

くなったり、あるいはまた子どもが主体でなくなつて教師の意図する方向に子どもを向かせるようなことがあつてはならないとも考えた。そのような考えから、近年は年々の教育課程に多くの時間をあてることをせずに、その分を実際の保育の場においてしっかりと一人ひとりの子どもを見つめ、その子どもに合わせて援助指導を行つてきた。

この気持ちは現在も全く変わっていないが、平成年度の新教育要領の告示・実施の時期に当たり、保育について種々考える中で、この機会に「保育のあり方」を考えつつ、「教育課程」についても今一度見直していこうという方向になつていった。

「幼稚園教育要領」を見ると、その第一章総則の一幼稚園教育の基本には次のように述べてある。

一、幼稚園教育の基本

幼稚園教育は幼児期の特性を踏まえ環境を通して行うものであることを基本とする。このため、教師は幼児と

の信頼関係を十分に築き、幼児と共によりよい教育環境を創造するように努めるものとする。これらを踏まえ、次に示す事項を重視して教育を行わなければならない。

- (1) 幼児は安定した情緒の下で自己を十分に発揮することにより発達に必要な体験を得ていくものであることを考慮して、幼児の主體的な活動を促し幼児期にふさわしい生活が展開されるようにすること。

- (2) 幼児の自発的な活動としての遊びは、心身の調和のとれた発達の基礎を培う重要な学習であることを考慮して、遊びを通しての指導を中心として第二章に示すねらいが総合的に達成されるようにすること。

- (3) 幼児の発達は、心身の諸側面が相互に関連し合い多様な経過をたどつて成し遂げられていくものであることと、また幼児の生活体験がそれぞれ異なることなどを考慮して、幼児一人一人の特性に応じ発達の課題に即した指導を行うようにすること。

これははからずも当園の幼児教育の基本理念と全く一致しているところであり、この考えを基にして当園独自

の教育課程を作成するのにも大いに意を強くした思いがあった。そしてここに新たなものを作成することは一つの前進として考えるだけでなく、当園にとっては過去から現代までずっと流れ続けてきた大切なもの、即ち倉橋惣三園長の時代からの自由保育・誘導保育と呼ばれていたものが、こうして現在まで受け継がれてきているが、更に今後ますますと伝えていくことも可能になるのではないかとも思われた。長い歴史と伝統をもつ当附属幼稚園には、過去からずっと脈々と受けつがれてきた「保育の心」がある。これは今後ますますと引き継がれていってほしいものであるとともに、その時代、その時に生活する子どもに合わせて新たなものと融合しあっていかねばならないと考える。

このような気持ちで、ここ数年かけて附属幼稚園の職員は「教育課程の研究」に取りくんできたがようやく本年刊行となった。しかし話し合いの中で屢々出て来て何度か中断しかかったりしたのは、思うところは多くある

のにそれを言いつくせないということである。出来上がったものを見ても、書き表しきれなかった面が多くもどかしい思いも多い。しかし一方では、当附属幼稚園の保育のあり方と、教師一人ひとりの子どもを大切にすること、そして子どもたち一人ひとりが充分に充ちたりた気持ちで生活出来る場であってほしいと願う教師の心は、少しは組みこんだつもりである。

今後はこの「教育課程」が私ども附属幼稚園の日々の教育実践の場で、保育を考える基礎的なものとして役立つことや、保育の方向性を示すものとして役立つことがあれば嬉しいと思う。更に「教育課程の研究」を続けながら、保育について話し合ってきたものが、私どもの中に残り、育って、保育の場へ再び向けられていくならば最も大きな収穫になったのではないかと考える。

(お茶の水女子大学附属幼稚園)